



煙の色々

道玄坂杏子

藤井健

藤井健は自分に必要なものを知っていた。それはよく、痛いほど知っていた。自分に欠けているのは、一人の女の子である。世界中のどこかに自分にぴったりの女の子が存在しており、その子も自分を探している。それが藤井にとってのゆるぎない信念であり、それ以外のことはすべてそのために捧げられていた。バイトも、コンパも、大学も、家族や友人でさえ、女の子の探求に捧げられていた。間違いなく、藤井はその周辺の男どもの中において抜きんで人あたりのいい男だった。どこに自分のためにあつらえられた女の子がいるかわからないのだから、誰かれ構わずソフトに当たる必要があったのだが、にもかかわらず、彼は女の子と縁がなかった。

藤井は眼鏡を掛けていた。そのことは、大した問題ではなかった。また藤井は生まれつきの癖っ毛で、寝癖でもないのにいつもどこかしらの髪の毛が跳ねていた。しかしそれもまた、問題ではなかった。あるいは藤井はそれほど背が高くなかったが、それもある種の女性にとっては問題とならなかった。藤井において問題だったのは、彼がそういったいろいろのことに無関心であるという点だった。つまり、藤井は自分が他の男たちとどう異なるのか比較する能力を決定的に欠いていた。このため、藤井は自分の長所を伸ばすこともできなかつたし、短所を縮めることもできないまま成長する。彼はただ、藤井として存在することしかできなかつた。だが彼の信念に比べて、こうした問題は取るに足りないものでしかない。

藤井は童貞ではなかった。むしろ女性経験が多いと言ってもいい。ただいずれの場合も彼女たちは藤井の上を台風のように通り過ぎて行ってしまうので、藤井はいつまでもそれがどういうことなのか理解できなかつた。行為の最中に自分が欲情しているということは分かるし、勃起しているのもよくわかる。それから彼女たちの中へ入って行くと、彼女たちの中が水よりもずっと粘度の高い液体で濡れているのもわかる。自分の腰のあたりに欲求がわだかまっているのもわかるし、それを放つ時の強い解放感もわかる。ただ彼にとって一連の行為は、あのたった一人の女の子とは切り離されていた。彼女たちとするセックスは彼の身の上に勝手に訪れるアクシデントで、ひとつも必然的ではなかった。彼にとって必然なのは、ぴったりの女の子一人だった。

結果として、彼女たちをつなぎとめておく、ということを藤井はしなかつた。彼女たちが彼にとって、たった一人の女の子ではなかつたからだ。彼女たちはすぐに飽きるし、彼以外の沢山の男たちのことを求めている。藤井はそうではなかつた。たった一人の女の子のことをずっと求めているし、待っていた。だから、それ以外の女の子たちのことは、ビルの間を吹き抜けていく風くらいに考えていたのだ。

藤井の日々は単調だった。バイトと大学と呑み屋が生活のほとんどを占めており、時折紛れるその他の女の子たちとのセックスをのぞいては、いやそれを含めても、何の変化もなかつた。ただ藤井は待っていた。その間も根気強く、たった一人の、自分にぴったりの女の子を探し続けていた。それは単調ではあれど退屈とは程遠い、努力の日々だった。日を追うごとに藤井の神経は過敏になっていった。道ですれ違うすべての女の子の中に、たった一人の女の子が紛れているかもしれない。すべての場所で注がれるあらゆる符合を、それは経験上九割がた気のせいだったのだが、見逃してはならないと彼は彼自身に銘じていた。実際ほとんどきちがいじみていた。だが、藤井はその信念だけを信じていた。どこかに、自分にぴったりの、たった一人の女の子がいる。彼はそのために生きてきたのだ。執念と呼んでよかつた。というのも、藤井はついに見つけたのだった。たった一人の女の子を。

野坂里香

野坂里香はスタイルの良い女の子だった。生まれつき色素の薄い瞳と髪の毛は、日常的に人目を惹いた。美人ではなかったが、特徴のある顔立ちは、むしろ彼女を形作る個性として貢献した。それは幸福な集合をなしていた。そしてそのことを彼女自身もよく把握していた。彼女は自分の何を男が好み、求めているのかを経験によって少しずつ獲得していった。最初、彼女を愛したのはもちろん父親であり、次に幼い弟であり、やがて家庭教師の男になり、次第に同級生へと変遷した。大学へ入学する段階で、さまざまな場では会う男たちの隙間に潜り込む術を、野坂はすでに獲得していた。

野坂はずっとただ一人の女の子になりたかった。どの男にとっても、自分がただ一人の女の子であればいいと願ってやまなかった。それぞれの男の心臓の奥の方に住みついて、いつもちくちくと針を刺すような存在でいたかった。

自分が忘れられてしまうという事態は、それゆえ野坂にとって最も残酷なことだった。幸いにして、これまでのところ、それなりの痕跡を各々の男の中に残せたという自負を、野坂は持っている。男たちは野坂を誘ったし、野坂を手放したくないというそぶりを見せた。彼女は彼らに十分な痕跡を残せたかどうか知りたかったので、常に自分から男と別れた。彼らが無様に延命を申し出る様子を見るのが野坂は好きだった。それ以前よりずっと彼らを愛おしく思った。とはいえ、それ以上関係が続けることは無意味であったので、野坂は常に次の男を探していた。

彼女は多くの男に愛されたが、誰も愛さなかった。恐らく自分を慈しみ育ててくれた父親と守るべき存在であった弟以外は、誰も。それさえも、仕事に就き彼らから遠く離れた今では温かな思い出以上の何かではない。彼女にとって、男たちは自分の痕跡を残す対象である。油絵におけるキャンバス、彫刻における丸太や粘土、足跡の残る地面や、カッターで傷つく机なのだ。彼らは彼女の痕跡を残すための何か以上のものではない。愛すべき対象では、ましてない。

そもそも彼女は付き合うということ、何かの真似のようにしてしか行えなかった。それは箱庭に似ていた。映画の中で見た女優がしたように、彼女は男に触れた。小説の中で少女が話すように、彼女は彼らにささやいた。彼らをたっぷり甘やかす、砂糖漬けの果物のように血液を彼女の液体で満たした。彼女はしばしば彼らと同化し、彼らの喜ぶものへと変化した。彼女にとって、その庭の中で何が起ころうとも問題ではない。その一切を、彼女がコントロールできるからだ。

野坂は知らなかった。たった一人の、自分にぴったりの女の子を探している男がいるということ。そんな男は想像の範囲外だった。野坂にとって男たちはいつもどこかに空洞を抱えていて、たとえば夏の暑い日に渴いた喉を潤すようにして、女を抱くのだけだと思っていた。その空洞は簡単なことで満たされ、簡単に空になる。だからこそ、彼女はその存在を踏みにじってでも、空洞を支える彼ら自身、彼らの根の所に住み着きたいと願ったのである。剥がそうとして剥がれなくなってしまった、シールの痕のように。もしかするとそれが彼女なりの愛情だったのかもしれないが、そう呼ぶには随分残酷なものであるには違いない。

運と命

その時の藤井の気持ちをどう表現したらいいのかは、難しい問題だ。それはとても静かな気づきだった。少しずつゆっくりと押し寄せて、喫水線を越えたところでようやく、ほんとうにすぐそばまで迫っていることに気づいたのだ。それまで平面的だった世界の中で、彼女の所だけ、空間が大きく歪んでいるようでもあった。広大な平野の上で、初めて人に出会ったかのようでもあった。

あるいはそれは、もしかすると本当に、初めて藤井が他者を認識した瞬間かもしれなかった。

最初、彼女の面持ちはとても大人しいという印象を、藤井は受けた。彼女を見ていると静かな水面を見ているような気にさせられるのである。しかし彼女の発する声は一言ごとに彼の骨の隙間に染み込むようだったし、仕草は、とりわけ煙草を口に運ぶ仕草は、それまで見たどの仕草より当然の趣を備えていた。何より彼女を取り巻いている気配に、藤井は圧倒された。それまで見たどの女の子とも違って、どの女の子とも違って、彼女は彼女らしかった。彼女こそ、あの、世界にただひとりだけ存在している、自分にぴったりの女の子だと、確信するのに時間はかからなかった。

彼女を知ってから藤井はどこにいても、どれほど遠くにいても、視界に入るところに彼女がいる限りは、彼女を見つけるのに苦労することはなかった。その時彼女は自分の仕事を終え、数人の仕事仲間と休憩へ行くところだった。それは思い出してみると、彼女と藤井が最初にもっとも接近した瞬間だった。藤井は自分の全人生がこの瞬間のためにあったのだと正しく理解していた。そして、ここで彼女に声を掛けずにすれ違うことは、自分がただひとつ信じてきた信念を完璧に裏切ることだと知っていた。だから、彼は一生分の勇気を使い果たすつもりで言ったのだ。

「綾さん、おつかれさまです！」

自分でも一瞬恍惚とするくらい素晴らしい発声で、藤井は迫田綾に叫んだ。彼女は少しだけ目を見開いて藤井を見ると、ごく何気ない調子で「おつかれさま」と言い、続けてこう言った。

「サービス業に眼鏡はまずいよ」

内容は問題ではなかった。たいていの会話において、内容は問題ではない。その時の藤井にとって、迫田と言葉を交わしたということが、何よりも重要だった。けれども、また、藤井は人あたりのよい青年でもあった。彼は言った。

「すいません」

素直であることは、幸運にも藤井が藤井として身につけている資質の一つだった。彼はほとんど、それによって女の子たちの心を捉えてきたと言っても過言ではなかった。迫田もまた、それに感じ入ったように少し表情を崩した。

「眼鏡ないのも、似合うと思う」

藤井の素直さは、迫田の素直さに伝染した。彼女は自分が素直な女ではないことを知っていたが、藤井の素直さが彼女を油断させた。

藤井はその時、人生でもっともよい瞬間に立ち会っていた。その会話が交わされた三十秒の間に、彼は人生の終わりまでの構想をすべて終えていた。これは輝かしい始まりに違いなかった。藤井は今から、本当に自分の人生が始まるのだと感じた。これまでの努力が実を結ぶときがきたのだ。いつになく高揚した意識が、彼に次の言葉を言わせた。話しているのが自分なのかさえ、よくわからなくなっていた。それほど興奮していたということになる。

「綾さんの携帯教えてくださいませんか？ 俺、電話します」

藤井に帯同していた仕事仲間が思わず口笛を吹いた。遊び仲間の周りでも、これほど率直な表現は滅多に聞かれなかったからだ。迫田はその言動に動揺してはいなかった。ただ、少しだけ困ったように眉根を寄せた。落ちていた箸袋を拾うと、胸ポケットから取り出した安物のボールペンで自分の電話番号とメールアドレスを記した。

「出ないこともあるけど」

と言い添えると、彼女は箸袋を藤井に手渡し、足止めされていた他の仲間と一緒に廊下の向こうへ消えていった。妥協のない調和を纏った後ろ姿を見送りながら、藤井はこれが輝かしい人生の一ページであることを確信していた。彼の人生はここから大きく変わるのだ。そう信じてやまなかった。

命と運

その日の前日、野坂は男と別れたばかりだった。それ自体はどうということのない、取り上げることもないような出来事ではある。いつも通り別れるはずだった。彼女は常に男たちの抜き差しならないところに入りこみ、それを無理矢理引き抜くことで彼らを傷つけてきた。それが彼女の満足であり、望みである。だが今回は最後の最後で思い通りにならなかった。つまり、男もまた彼女を手放したがっていたのだ。

明け方男が帰ってしまうと、野坂はテーブルに放り出してあった煙草とライターを取って外へ出た。

どこで間違えたのか、野坂にはまったくわからなかった。思い返してみたところでどの場面でも、彼は完全に彼女を求めていた。常につきまとい、束縛し、激しく責め立て、その中に放った。確かに野坂は、男が達する時の顔が一番好きだった。くしゃみが出そうなのを必死で堪えるような、崩壊を前にして悔やんでいるような、歪んだ表情を彼はする。その時だけ、彼を征服できたと感じることができる、その瞬間がとても好きだった。そこで野坂は気づいた。彼は、完璧すぎたのだ。

始発まではまだ時間のある市電の停留所で、金属製のベンチに腰を掛けた。スタンド式の灰皿が凍りついたまま佇んでいる。彼女はいつも家の前にあるその灰皿で煙草を吸う。部屋で吸うことは禁じていた。それにペランダがなかった。換気扇の前で吸うのはみすぼらしくて嫌だった。コートの前をしっかりと合わせて着こむと、野坂は煙草に火をつけた。接客を生業とする人間で、煙草を吸う者は多い。強いストレスが彼らを煙草や酒に向かわせるのだ。野坂が煙草を吸い始めたのは仕事に就く随分前のことだった。付き合っていた男の煙草をいたずらするうちに、癖になった。一口大きく吸い込むと、彼女は細く息を吐いた。そう、あの男は完璧すぎた。

そこに思いだしてみると、彼のとったあらゆる行動が腑に落ちる。どうして気付かなかったのか不思議でさえある。彼は野坂と同じだった。つまり、彼もまた、ただ一人の男になることを欲していたのだ。彼女の箱庭は、彼の庭でもあった。野坂と男は互いに互いの抜き差しならないところへ入りこもうとし続けて、互いに奥深く入りこんだという確信を抱き、互いに潮時だと感じたということだ。

ひらりと懐に入り込み、一閃を残して飛びのいた今、野坂は自分自身もまた無傷ではないことを知った。

こんなはずではなかった、と野坂は思う。自分はたった一人の女に充分なれるだけのものをすでに持っている。最適な手段を講じて男に深入りしてきたはずだし、その手に間違いはないと今も信じている。それなのに、男の中におそらく、かすり傷さえも負わせることができなかった。運が悪かったと思うには、彼女は自信を持ちすぎていた。その敗北、男に自らを刻みつけるのに失敗したという敗北を、野坂はすぐには受け入れられなかった。

同時に彼女は、自分の受けた刃の痕を気にしなかった。深くはないが確実な傷を彼女は受けていたのに、それについて考えることをしたくなかった。彼女にとってそれは取るに足らないものでなければならない。自分の中にたった一人の男が住み着くことなど、あってはならないからだ。そうなれば、彼女は二重の敗北を喫することになってしまう。野坂は煙草を灰皿に押し付けると、一気に火を消した。空が白んできていた。

回転

藤井の行動は早かった。バイト帰りに呑みに行った後、早速迫田にメールを送ることにした。財布にしまってあった箸袋からアドレスを写すと、「藤井です。いま時間ありますか」といった内容のメールを送った。最初のメールは届かなかった。手書きのアドレスから写し間違えたのだと理解し、確認し、間違っていそうなスペルをひとつ直してもう一度送った。だが、それも届かなかった。

いくつかの可能性を藤井は意図的に無視した。彼女に限ってそれはない、と彼は考えた。なぜなら、藤井にとって迫田がたった一人の女の子であると同時に、迫田にとってもまた、藤井はたった一人の男の子であるはずだったから。彼は自らの幸運と、勇気と、努力でこの細い糸を掴んだことを自ら褒めたたえ、鼓舞した。彼は今や、電話をすべきだという結論にたどり着いていた。それゆえ、藤井は電話をかけた。

「はい」

耳元から入って来る迫田の声が自分の脳内を満たしていくのを藤井は感じた。それは脊髄を通り血液となり、彼の全身にいきわたるようだった。空腹時に糖분을補給したときのように軽く眩暈がし、手が震えた。

「あの、藤井です。メールしたんだけど、届かないみたいで」

「ああ、そう。ごめんなさいね」

藤井は喉が震えるのをこらえられなかった。驚いたことに、彼は泣きだしそうだったのだ。

「綾さん、家どこですか。今から行ってもいいですか」

「酔ってるね」

「賢治さんたちと飲んだ帰りなんです」

「ダメよ」

彼女ははっきりと言った。

「家には呼べない。帰りなさい」

すぐに言葉を継げないことに、彼は気付いていた。吸った息を吐き出せなかった。藤井はあるはずがない緊張の塊を嚥下した。

「えーと、じゃあ綾さんがこっち来てくださいよ」

「なんで？」

「だって」

声が震えた。

「俺は会いたいからです」

その時なぜ「俺は」と言ったのか藤井にはわからなかった。むしろ「俺が」と言うべきだったし、もっと正当な意味では「俺も」と言うべきだった。だが、その時藤井は確かに「俺は」と言ったのだ。そしてそんなことよりもずっと、泣きださずにいるのに精いっぱいだった。電波の向こう側から沈黙が聞こえた。

「この時間にうちに来るってどういうことかわかってる？」

「わかってますよ」

会えば彼女と寝るということはわかっていた。だがもっとも重要な点、その行為が何を意味するのかということを藤井は理解しなかった。理解しようとしなかった、と言うほうが恐らく正しい。それが自分に意味するのと同じことを意味すると、彼はまだ思いたかった。微かなため息の振動の後。

「32番の電車に乗って。教会広場で降りて。迎えに行くから」

電話が切れた時藤井には、十時間ほど前に迫田に声をかけたときの高揚は微塵も残っていなかった。ただ重苦しいものが胸を潰しそうになるのを見ないようにすることしかできない。それでもまだ彼の脳裏には、彼女の美しい仕草や、素晴らしい声の反響が残されていて、それらが藤井を32番の路面電車に乗せることに成功した。夜間運行32番の中に、人はまばらだった。

転回

その日、たまたま別れた男と同じ会場に仕事で入らなければならなかった。多くのことを幸福に受け取ることのできる野坂の感性でも、それは不快な物事に分類された。できれば男が来ないか、彼女自身が休むべきだった。だが世界はもはや彼女の論理で動いてはいない。彼女はそこへ行かねばならない。憂鬱の尻尾を引きずりながら彼女は着替えた。

そうして仕事場で彼女は見ることになった。男が別の女と一緒にいるのを。実に親しげだった。彼らは笑い合っていた。何度か体に触れあった。いくらでも訝しむことのできるほど、たとえば性的なものさえ感じさせるほど、二人は近しく頬を寄せて話していた。ただの仕事上の打ち合わせと言うには、あまりに近いと野坂は思う。

その女は決して美しくなかった。目も口も小さかった。背も高くなかったし、胸も大きくなかった。ただ彼女の立ち居振る舞いに、実に僅かながら、媚態が混じっているのを野坂は見てとった。その僅かな案配が、彼女を苛立たせた。意識しているかしていないかのごく狭い領域に、女は自然と立っている。その立ち位置に、苛立っていた。

野坂には、自分の中に起こる感情がなんなのかわからなかった。怒りによく似ていた。だが怒りほど強く昂ぶっているわけではない。みぞおちのあたりにゆっくりと凝り固まっていく痛みにも似ていた。だがむしろそれは、吐き気を催す嫌悪に近かった。

一般的に、嫉妬と呼ばれるものを彼女は抱いていた。あの女をめちゃくちゃにしたいという衝動に駆られた。野坂の世界の調和は失われて、今や彼女は世界に置いていかれそうになっている。彼女は慌ててその世界に追い付かなければならない。

事実だけ並べるなら、予想外のことはひとつもなかった。

そのすべてにおいて、藤井はひとつの喜びも感じることはなかった。

迫田は約束通り停留所に立っていた。制服ではない彼女の姿を見るのは初めてのことだった。細身のジーンズに青いセーターを着込んで、上から茶のダウンジャケットを羽織っていた。寒さからか、彼女の頬は少しだけ赤く染まっていた。ポケットに手を突っ込むと、煙草の代わりに飴玉を二つ取り出した。「食べる？」と言うと一つを口に放り込んだ。藤井は黙って受け取った。

「少し減らすことにしたの、煙草」

歩きながら話す彼女の声が、歩くにつれて振動する様子もその息遣いまで含めて聞こえる。彼女は少しだけ、高揚しているようだった。あれほど憂鬱そうに、それゆえ気高く見えた彼女の表情は、健康的な期待に満ちていた。藤井がこれまで何度も見てきたはずの、現実的な表情だった。藤井はもはやすっかり冷静だった。だがその冷静さが、彼を苦しめていた。酔いは随分前に醒めている。酔いのせいではない。それゆえ尚更、藤井は失望していた。確かに、彼女は変わらず静かな面持ちで、彼の隣を歩いてはいた。またその声を聞けば血が沸き立つようでもあった。ところが彼女の印象は隣にいればいるほど次々に剥がれ落ちて行って、今や、彼女の周囲にある空間は、藤井がこれまで嫌と言うほど見てきた平坦なそれにすぎない。

部屋に着いて、何を話したのかさえ藤井は覚えていられなかった。迫田の印象は急速に薄らいでいた。もはやそれは、手の中にあるのかどうかさえわからない程度だった。なんということだ、と藤井は思った。あのとき神々しいまでに輝いていた自分の人生は、また困難な探索へ戻らねばならないのだろうか。悲しいことに彼にはもう迫田綾が、他の女の子たちと同じようにしか見えなかった。小さな薄い唇も、控えめに穿たれた瞳も、少し比率のおかしいくらい小さな頭も、あるいは痩せすぎの体も、それゆえ纏っていた異質さも、迫田は放棄してしまっていた。そこにいるのは迫田綾ではなくもはや女の子で、しかもこれから起こる動物的行為への期待で頭がいっぱいになった、欲情した女の子だった。彼女の体は他の女の子と同じように少しだけ冷たかった。彼女の中は他の女の子たちと同じように熱かった。藤井は他の女の子たちに対してと同じように欲情した。そこにいるのは確かに一人の女の子ではあった。けれどそこにいるのは、あの女の子ではなかった。たった一人の、自分にぴったりの、彼がそれまでの生涯をつぎ込んで求め続けた女の子ではなかった。それはただの女の子だった。ただ彼の動きに伴って息を吐く、女の子だった。

欲求と衝動を伴う運動になっている間に、一度だけ藤井は迫田の声を聞いた。

「なぜ私なの」

藤井は答えられなかった。次の瞬間には彼女の上に自分の欲望をぶちまけていたからである。

崩壊

その日に限って、部下のミスが多かった。小さな失敗、たとえば食器を割るということは茶飯事だったが、その日はそれが、洗い上がったケース六個分を丸ごと横倒しにするという規模で起こった。その上、中に入っていたのは割れやすいシャンングラスで、以前なら彼らの給料は完全になくなってははずだ。あるいはトレーに八個載せたビールグラスすべてを客にかけた部下もいた。たまたま泊り客で着替えがあったから助かったが、そうじゃなかったら彼女の給料三カ月分ほどの弁償が生じたかもしれなかった。

フロアに出入りする全員が殺気立っていた。客もまた、その殺気を少なからず感じてぴりぴりしていた。悪い状態だった。野坂は責任者として事態を收拾しなくてはならない。そして彼女はそれをやりおおせた。彼女はグループリーダーを集め短いミーティングをもち、彼らに決して怒鳴るなと伝えた。彼女が伝えたことはそれだけだった。何があっても仲間を怒鳴るな。あとは何をしてもいい。グラスをいくつ割ろうが、客に何杯ビールをかけようが構わない。野坂は知っていた。人は否定されることで委縮する。対応を常に要請される場面において、委縮して行動できなくなることはもっとも避けたい事態だった。野球の試合と同じだ。負の連鎖はどこかで断ち切っておかなくてはならない。

潜在的なファンを失った可能性は否定できない。だが潜在的可能性は常に一定数存在する。それに対する対応は日常的にすでに行われていて、その日はむしろ、傷口を広げることを防がなければならなかった。客がはけた後の会場で、部下たちが笑いあいながら片づけをしているのを野坂は見ている。クロスの衣擦れや食器がぶつかりあい反響するざわめきが心地よかった。もうあと数十分すれば会場はすっかり別の顔をしているはずだった。痕跡を失っていく会場を見るのは気持ちが良かった。そうして一日が終わって行くのを見るのが、彼女は好きだった。だが調和を失った世界は彼女をそのままにしておかなかった。

確かに少し、野坂は疲れていた。だが判断できなくなるほど疲れていたわけではなかった。だからやはりそれは、思考の結果ではなかった。

「君ならできると思った」

まったく同じ口調だった。初めて出会ったときに男が野坂に見せた表情と同じ表情を、彼は別の女に対して見せながら、その時口にしたのと同じセリフを口にした。男の向こう側でさっきの女が笑っている。背中のすべてに鳥肌が立ち瞬間的に全身が熱くなった。それまで野坂は想像したことがなかった。自分が激情に駆られる様というものを。だがその時確かに彼女は自分の感情を制御できずにいた。頭の隅の方でその様子を、まるで他人事のように見ている。

「里香さん？」

近くにいた部下が不審がって声をあげた。その声は彼女に届かなかった。野坂は自分が男を凝視していることにさえ、気付かなかった。彼女は黙って男に近づくと、肩に手を置いた。男は不意に置かれた手に気づいて振り返った。野坂を認めて、男は曖昧に笑った。その瞬間、彼女は完全に自我を喪失した。

大変見事な音だったと、後に回想した部下は言った。その印象的な素晴らしい音と共に男の左頬は張り飛ばされ、次の瞬間みぞおちにひざ蹴りを、胃袋いっぱい分頂戴した。野坂里香はかつて今も、スタイルのいい女だった。黒いヒールから伸びる彼女の長い足と細い膝頭は、正確に男のみぞおちを捉え、ゆっくりと筋肉の奥へ浸透した。音はなかった。周囲の音は消えていた。比喩ではなく、機器類を除くあらゆる動作が静止し、彼女と男の行く末を見守っていた。奇跡のような静寂だった。

「そう、私ならできる」

食道を逆流してくる胃液に抵抗しながらうづくまる男の上へ、野坂は言葉を浴びせた。新しい女は、立ち尽くしたままそれを黙って見ていた。野坂は思う。この女はこれから男を憐れみ慰めるだろう。言葉と体を使って。それは彼女なりの術であるには違いない。だが、その女と同列に扱われるのは御免だった。

野坂の世界はふたたび調和を取り戻した。彼女は男に傷をつけた。それは物理的な傷ではあったが、同時に、いつも以上に強烈な傷ではあった。その調和はしかし、もう大人しく閉じた環ではなかった。環の端は外れ、螺旋を描きながら上昇を始める。彼女はこれからずっと、その環を追い続けなくてはならない。彼女は男との間で往復し完結する関係を終わらせた。彼女の意図は、箱庭の外へ向けて今や勢いよく流れ出している。

必然か偶然か

迫田の部屋を出るとき、藤井はほとんど絶望していた。こんなはずではなかった。世界のどこかにたった一人だけ存在している女の子とは、こんな簡単にセックスして帰ることができるような女の子ではなかったはずだ。もっと、いわば神秘的な存在のはずだったし、その体験ももっと感動的なもののはずだった。それまでのどんな女の子とも違うセックスであるべきだったし、それまでのどんな女の子とも違う言葉を交わさなくてはならなかった。にもかかわらず、迫田綾はそれほど特別な存在ではなかった。臍肩目に見積もって、せいぜい少し変わった女の子だった。そんな女の子は、藤井の経験の中にごくありふれていた。悲しいほど、彼女は特別ではなかった。

そもそもどうして彼女を特別だと思ったのかさえ、藤井は考えなくなかった。無意味なことができる気分ではなかった。彼は必然を見誤ったのであり、それゆえ、自分自身の直観に疑問を呈せざるをえないところに来ていた。藤井は人生で初めて、自分の信念に対して疑問を抱いていた。自分の信念は、これまでずっと唯一の指標として抱き続けてきたあの信念は、誤っていたのではないか。恐ろしい想像だったが、迫田を抱いてからずっとその思いから逃げられない。

たった一人の女の子は消え去ろうとしていた。迫田の印象が現実味を帯びれば帯びるほどに、それゆえ経験的に蓄積された彼女たちの一人としての地位を確固たるものにしていくほどに、彼の世界にずっと存在し続けてきた、柔らかい肌の、ささやくような声で彼の名前を呼ぶはずだった女の子は、藤井のもとから遠ざかっていく。彼は引き留めることができなかった。彼は素直な男だった。自分自身の間違いを認めるときさえ、そのよき性格は発揮された。彼は気づいた。彼女は、たった一人の、自分にぴったりの女の子は、現実世界のどこにも存在しない。もし存在するとしても、自分が触れればたちまち消えてしまうだろう。彼の前にいるのは、彼が抱くことのできる女の子とは、物理的な質量をもった、重たくて冷たい体をもった、現実的な女の子だけだ。

歩いていく先々のアスファルトに街灯が青い影を作っていた。それは藤井の影だが、彼とは違う方向へ動いていく。動いているのは藤井であり、相対的に位置をずらしているのは街灯であって、影が動いているわけではない。だがなおも影は彼と異なる方向へ動いていった。光源が失われたら、影もまた失われる。影の根拠は、藤井の存在とはまったく関係のないところで生成し、にもかかわらず、彼の存在の影響を受けていた。通りの端まで歩いて、街灯は途切れた。先には平坦で広い道がためらいがちに距離を伸ばしているだけだ。街はそこで終わりだった。影もまた、そこで途切れた。

夜間運行の電車から、始発電車に切り替わる時間帯で、線路の上にはまだ霜が降りたままだった。藤井はその瞬間、ほんとうの瞬きの間だけ、帰る道を見失っていた。どこをどう歩いてきたのか忘れていた。藤井は自分の影しか見ていなかった。その影が投影されている石畳も、線路も、アスファルトも、今になって初めて見た。路面電車の線路沿いに歩いてきたはずだった。だが、どちらへ歩いてきたのかも、もう忘れていたのだ。

藤井は素直で正直な男だった。そしてまた、それほど馬鹿でもなかった。いずれにしろ、線路の上を歩けば停留所に着くはずだし、少なくとも、街の方向へ戻れば、その距離は長くはない。オレンジ色の街灯の向こう側、白むまでやある空を眺めながら、藤井は元来た道に戻ることにした。ともかく、それがもっとも近道である気がした。

二人分

どれくらい歩き続けたのか、藤井は覚えていない。ただ気付いたら、停留所のひとつに着いていた。教会広場から二つしか離れていない、それゆえ迫田綾のアパートメントからもほど近い、停留所だった。藤井の体は冷え切っていた。四月になるとはいえ、明け方の気温は完全に冬なのだ。基本的に野ざらしの停留所では、電車が来るまでの時間をしのげそうにはなかった。もう少し街の中心部の方へ歩けば二十四時間営業のカフェがある。電車で来る時に窓の外に見止めていた。じっとしているよりは、いいように思えた。

反対側の停留所に目を向けると、人がいた。こんな時間に停留所にいるのはろくな人間ではないだろうことは予想がつく。藤井は無視することに決めたが、もう一度目を凝らしてみると、それは知人であるような気がした。もう少しじっくりと眺めると、実際にそれは、バイト先の上司だった。

「里香さーん」

藤井はわざとらしく口の前で手を丸めると、人影に向かって叫んだ。人影は少し驚いたように顔をあげると、藤井の方を見た。驚いているようだった。藤井は電車が来ることもない線路を横切ると、彼女の元へ走った。黒い厚手のコート、恐らくウールのコートを羽織った野坂は、煙草を吸っていた。藤井はコートに穴があいたりしないのだろうかと思う。

「どうしたの、こんな時間に」

「それ、こっちの台詞ですよ」

藤井は声をあげて笑った。寒さで腹筋がどうにかなっているようだった。藤井はなかなか笑いやまなかった。自分で止めるのが難しかったのだ。

「里香さんこそどうしたんですか、停留所で煙草なんか吸って」

「部屋で吸うのがいやなのよ、汚れるから」

そう言った野坂は火のついてい一本を咥えると少しコートの前を開けて見せた。中はだぼついたジーンズにカットソーという薄着だった。

「寒くないんすか？」

「慣れてるからね」

「いつもここに吸いに来るんですか」

「そうね、だいたいいつもここ」

野坂は訝しげに藤井を見た。

「あんた、もしかして綾んとこからきたでしょう」

「え、なんで知ってるんですか」

「あんだけ豪快に告白したら塞いでても耳に入るわ」

そう言って野坂は目だけで笑った。声はたてなかった。

「にしてもえらい寒そうねえ」

自分でも忘れていたが、藤井は確かカーディガンを一枚余計に着ていたはずだった。だが今彼はTシャツの上ですぐジャケットを羽織っている。たぶん、迫田の部屋に置いてきたのだ。

「うちくる？狭いけどここよりはあったかいわよ」

「え、いんすか」

「変なことしたら殴るから平気よ」

そう言って野坂はじっと藤井を見る。

「それにあんた、忘れっぽそうだわ」

野坂は藤井の中に自分を残すのは無理だろうと思う。傷をつけるにはあまりにも、空虚だ。

「そんなことないですよ」

藤井は嘘を吐いた。どう考えても、自分のもの覚えが良いとは言えない。もの覚えがよければこれまで関係した女の子が全部重なり合って一つの像に見えたりはしないはずだ。だが、素直さは嘘をつかないということではないのだと、藤井はいま気付いたのだ。彼は素直に嘘を吐いた。藤井は、自分の素直さがある種の武器になりうることを、初めて自覚した。

同時に彼は薄いジーンズと薄いTシャツの上にジャケットを羽織っただけの軽装で、ほとんど凍えかけているのだということにも気付いた。哀れなありさまだった。そんなふうに分身の姿を見るのも初めてだった。つまり彼は、自分を評価していた。

「どうだか」

野坂は知っていた。藤井は次々女を変える。それは藤井が望んでいることのように見えなかった。女たちは彼の中にうまく存在し続けることができず、それに我慢できなくて彼の元を離れていったのではないかと思っていた。おそらく、綾も例外ではなくなるだろうという予感を、野坂は抱いていた。

「里香さん、俺寒い」

「おや、失礼」

里香は灰皿に煙草を押し付けると立ちあがった。

「すぐそこ。もう少しだけ我慢してちょうだい」

藤井は先立って歩く里香の、黒く盛り上がった後ろ姿を見ながら、それを見ている自分を見ていた。それは魔女と召使のようにも見えたし、老婆を追う飢えた狼のようにも見えた。あるいはただの女と男でもあった。藤井は平坦な世界に数多くの髭が存在することを知った。それらは一見単調であったが、細部はめまいがするほど複雑だった。藤井はその一つへ入りこもうとしているのを感じた。身震いする里香の手を彼は取った。

「ちょっと、冷たいじゃない」

「こうしたらいんです」

藤井は彼女の手を掴んだまま、自分の手ごとその黒いコートのポケットに突っ込んだ。想像通りそこは温かった。

「あったか」

野坂は彼の動きに一瞬身を強張らせたが、鼻で息を吐くとその手をポケットから放り出す。コートの片側だけ袖を抜くと「ひどいなあ」と言う藤井の上から半身分かけた。藤井はよろけながらその片裾をしっかりとつかむと、里香に体を寄せた。

「ね、このほうがあったかいでしょ」

二人分の体積を内包したコートを街灯が照らした。影が大きく伸び、車道にかかる。そこを新聞配達のスクーターが横切っていく。東の空はまだ暗いままで、朝だけが確実に近づく。

煙の色々

<http://p.booklog.jp/book/24615>

著者：道玄坂杏子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dogenzakakyoko/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

お手に取っていただけて、これ以上嬉しいことはありません。

ありがとうございました。

よろしければ、ご感想など

<http://p.booklog.jp/book/24615>

ブックログのパブー本棚へ

<http://booklog.jp/puboo/book/24615>